九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学韓国学研究者紹介：辻野裕紀准教授

辻野, 裕紀
九州大学大学院言語文化研究院 ： 准教授 | 九州大学大学院地球社会統合科学府 ： 准教授

https://doi.org/10.15017/2004826

出版情報：韓国研究センター年報. 18, pp.11-15, 2018-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

辻野（つじの） 裕紀（ゆうき） 准教授

プロフィール

大学院言語文化研究院准教授、大学院地球社会統合科学府准教授。
博士（文学）。専門は、言語学、とりわけ韓国語学、音韻論、言語思想論。担当科目は、「韓国語Ⅰ」、「韓国語Ⅱ」、「韓国語Ⅲ」、「韓国語フォーラム」、「韓国語表現・読解演習」、「ことばの科学」、「多文化共生教育論（言語思想論）」など。主要論文に、「韓国語大邱方言における名詞のアクセント体系」（『朝鮮学報』209、朝鮮学会、2008年）、「現代韓国語における混成語形成の形態論」（『日本語学研究』29、韓国日本語学会、2010年）、「言語形式の自立性と音韻現象：現代朝鮮語の〈n挿入〉を対象として」（『朝鮮学報』229、朝鮮学会、2013年）、「言語教育に伏流する原理論的問題：功利性を超えて」（『言語文化論究』37、九州大学大学院言語文化研究院、2016年）など。

言語学者として

冨樫：先生は語学がご専門でいらっしゃいますよね。
辻野：はい。私の専門は言語学、韓国語学です。
冨樫：最初はフランス語をご研究されていたと伺いました。どういったきっかけで韓国語学を学ぼうと思われたのですか。
辻野：元々ことばに関心がありました。フランス語を専攻した理由も、フランス語学を専門的に研究したいというよりは、フランスは言語学の国という漠たるイメージを持っていたからです。言語学を研究するには、まずはフランス語ができることが不可欠だと当時は考えていました。いま考えると、フランス語ができなくても、言語学の研究はできるのですが（笑）。学生時代には、他にも様々な言語を学んでいましたが、その中で最も面白いと思ったのが韓国語でした。学部時代は、フランス語を専攻しながら、韓国語学のゼミに所属し、大学院からは本格的に韓国語学の研究室に進みました。素朴に知的な面白さを韓国語に強く感じていました。周りには、朝鮮半島にルーツを持っていたり、親族や近しい人に韓国語母語話者がいたりして韓国語を学び始めたという人もいたのですが、私の場合は、そういうある種の実存的なところではなく、かなり観念的な関心からスタートしています。
冨樫：具体的にはどこに魅力を感じられたのですか。
辻野：やはり日本語と似て非なるというところだと思います。韓国語を諦視するということが母語の日本語を深く理解するということへと繋がっていきます。逆もまた然りです。このような日韓両言語間の津梁を往還する、学びのプロセスがとても面白く感じられました。ヨーロッパの言語は、前提として日本語と全く異なるというのがあるので、日本語と比べて云々という視点は持ちにくいのですが、韓国語は日本語に一見相似していて、最初は学びやすい。しかし、さらに探究していくと、実はなかなか異なるということが分かってきます。似ていると思うと、異なる点に逢着し、異なると思うと、似ている点を発見する。こうした「裏切られ」の連続が日々面白かったのです。一方で、方言や語史へのマニアックな関心も、かなり

早い段階から持っていたように思います。

冨樫：私も韓国語を話しますが、韓国語の発音をしてみたいという思いがありました。例えば、짬뽕(チャンポン)といった濃音を発するのが楽しかった記憶があります。先生はいかがでしたか。

辻野：そういう音の快楽もよく分かるのですが、私の場合は、どちらかというと、文字への興味がありました。暗号にしか見えないハングルを「解読」したいというのが、韓国語を学び始めたひとつの動機です。

冨樫：言語学というのはどのような学問なのでしょうか。

辻野：ことばをめぐる問題であれば、基本的に言語学が引き受け得ます。この意味において、言語学が扱う領野は大変広いと言えます。言語学を学ぶのであれば、まず、音声学の知識を得なければなりません。調音器官の構造など、医学や解剖学の教科書にも出てきそうなことを徹底的に学びます。音声学自体、独立した学問ですので、厳密には言語学ではないのですが、言語学徒の必修科目です。言語学の枢要は、音声学的研究で得られた実体としての音を抽象的なレベルへと昇華させる、関係論としての音韻論や、形態論、統語論、文法範疇論のような狭義の文法論、談話論やテクスト論などでしょうか。主に意味を研究の俎上に載せる意味論や語用論も、もちろん言語学の埒内です。また、連字符社会学(カール・マンハイム)ならぬ、連字符言語学ではありませんが、社会言語学や心理言語学などのように、言語学に他の語を冠した領域もあまたあります。社会言語学であれば、文字通り、社会と言語の関係を扱い、そこには文化的な要素も濃厚に関与しています。言語習得論などの分野では、核磁気共鳴画像法(MRI)や脳波計など、医学的な装置を用いた研究もあり、門外漢ながら医学や医療にも興味のある私としては、魅力的な分野です。自分ではまだそういうテーマで論文を書いたことがありませんが。一般に、言語学というと、語源学や規範文法と同一視されている向きがありますが、そうした、人口に膾炙したイメージとはかなり異なると思います。

冨樫：先生の具体的なご専門を踏み込んでお伺いしてもよろしいでしょうか。

辻野：主に形態音韻論やアクセント論に関わる論文を書いてきました。具体的には、例えば、韓国語には〈n挿入〉と呼ばれる現象がありますよね。「韓国料理」を意味する「한국요리」は普通「ハングギョリ」ではなく、境界に/n/が挿入されて「ハングンニョリ」と発音される。これを〈n挿入〉と称呼するわけですが、一体どういう条件で起きるかという問題があります。一般的には先行要素が子音で終わり、後行要素が/y/か/i/で始まり、かつ後行要素が自立的な要素であるときに生じると説明されるのですが、実際に調べてみると、こうした条件を総て充足していても、〈n挿入〉が起きない場合があります。個人差や世代差、方言差も観察され、その実態について、調査を行なってきました。また、同じ形態音韻論的現象として〈濃音化〉という現象もありますが、これも、いかなる条件下で生起するのか、生起しないのかについての分水嶺は完全には分かっておらず、その研究も少しずつ進めています。

冨樫：先生のご研究ではフィールドワークに軸足を置かれているのでしょうか。

辻野：そうですね。実際に韓国へ行ってインタビューを行なうなど、フィールドワークに基づいた研究をしています。先ほどお話しした研究では、ソウル方言話者の若年層を対象としていましたが、その他、大邱でもフィールドワークを行なったことがあります。

冨樫：大邱ということは、方言にもご関心がおありでしょうか。

辻野：はい。大学院時代には中期朝鮮語を一生懸命勉強していました。15世紀の朝鮮語には、意味の弁別に関わるピッチアクセントがあったことが知られています。このようなアクセント体系は現在のソウル方言では失われているのですが、慶尚道方言には残っています。しかも、中期語と一定程度の対応関係が維持された状態で残存している。このことを知って、仔細に調べたら絶対に面白いに違いないと思い、自分でも調査をしました。

冨樫：今はどういったことをご研究されていますか。

辻野：先ほどお話しした〈n挿入〉の続きで、ソウルではない別の地域ではどうなっているのかという点に関心があります。〈n挿入〉だけでなく、〈濃音化〉など、個人差が認められる形態音韻論的現象を中心に研究を進めています。また、最近では、言語教育に関する文章も積極的に物しています。言語教育というと、一般には、教授法の研究などといったイメージがあるかと思いますが、私の場合は、実践的な方法論よりも、教育実践を支える原理論的な側面に関心があります。「なぜことばを学ぶのか」とか、「言語とは何か」とか、「学びとは何か」などといった、哲学や思想の問題にも連なっていくような根源的な主題について、広く人文学的な知見を援用しつつ、思考を深めています。こうした問題は、顕示的エビデンスの提示が要求される学術論文という形では論じにくい場合もあるのですが、考究に価するテーマです。

冨樫：いったいことばを学ぶとはどういうことでしょうか。

辻野：「ことばはコミュニケーションの道具」とよく言われますが、それは違います。一種の言語の矮小化でしょう。もちろん道具としての側面は否定できないのですが、言語は人間の存在の根幹に関わるもっと深奥なものだと思います。人間の思考を統べているものでもあるし、アイデンティティを規定するものでもある。知の筐体としての機能もある。それに、何よりも、言語は人間を他の動物から区別する種差です。しかし、言語の矮小化という病理は根深く、言語教育界の内部にさえ瀰漫しています。そもそも病識がない。そうした風潮に抗うべく、矮小化のエティオロジーを深掘りしつつ、私なりの文体と論理で、自己目的的な行為としての言語学習について、これからも発言をしていきたいと考えています。

韓国朝鮮学、韓国語教育と九州大学

冨樫：九州大学にいらっしゃる前は韓国の大学で教育研究をされていたとお伺いしました。

辻野：韓国ソウルの誠信女子大学に3年間おりました。日語日文学科にいたので、日本語、言語学(日本語学)、古典文法などを韓国語で講じていました。

冨樫：その後、九州大学にいらっしゃったのですか。

辻野：そうです。2012年4月に赴任しました。

冨樫：韓国でのご経歴をお持ちでいらっしゃいますが、韓国学という枠組みでは九州大学はどのように感じられましたか。

辻野：何よりも韓国研究センターや文学部に朝鮮史学研究室があるというところが素晴らしいと思いました。1974年という早い時期に朝鮮史学研究室が創設されているのですが、戦後、東京外国語大学に朝鮮語学科が復活するのが1977年なので、それよりも3年早いということになります。1970年代前半に、韓国朝鮮学を専門的に学べる大学が、天理大学、大阪外国語大学など、数校に限られて

いたことに鑑みると、朝鮮史学研究室の設置は、とても画期的なことであっただろうと思います。また、韓国研究センターも20世紀末という時代の転換期に、国公立大学でははじめての韓国学研究の拠点として華々しく設立されています。このように、九州大学には、つとに韓国朝鮮学の研究者集団としての組織が確固としてあり、その枠組みの中で個々の研究教育の実績がしっかりと蓄積されてきたことは誇るべきことだと思います。

冨樫：そうですね。韓国でも、九州大学というと韓国研究でも認知されていると思います。韓国語の授業をされるときに重視されていることはありますか。

辻野：学部1年生を対象とした初回の韓国語の授業の時に強調するのは、韓国語は、授業で習ったことがその日のうちに学内で実践できる言語であるということです。学食や次の授業で隣に座る人が韓国語母語話者である可能性は結構高い。そういう、日本に居ながらにして日常的に接し得る日本語以外の言語は、韓国語のほかには中国語ぐらいしかないでしょう。積極的に母語話者と話すことを慫慂しています。

冨樫：私も最初に韓国語を学んだ時は、使いたくて新大久保に行っていました。近年、K-POPなどの影響で、韓国語を学ぶ年齢層が高校生や大学生など若い世代へと移っている印象があります。韓国語を学び始めた学生になにかアドバイスはありますか。

辻野：大切なことは、常に韓国語に触れているということだと思います。特に「聴く」ことを重視するのがいいでしょう。韓国語は形態音韻論的交替が極めて激しい言語、つまり、聴き取りがとても難しい言語と言えます。ですので、聴く訓練を厭わず、徹底的に行なうことがまずは肝要ではないでしょうか。文字で見れば簡単なことが、耳で聴くとさっぱり分からないということが、とりわけ初級の段階ではよくあります。もうひとつは、留学を希望する学生によく言うのですが、とにかく語彙を増やすということです。学生たちを見ていると、留学先で一番苦労するのは、語彙が圧倒的に不足しているということのようです。語彙を増やすことは日本でもできることですので、留学に行く学生も、行かない学生も、貪欲に語彙力に磨きをかけてほしいと思います。

冨樫：先生は韓国語の授業を担当されておりますが、日本の大学で韓国語を教える意義、または学ぶ意義はどこにあると考えられていますか。

辻野：よく言われるように、異文化理解や相互理解などといったものも当然、言語学習の意義でしょうが、言語学徒としては、それらを超えたものがあると言いたいと思います。異文化理解、相互理解のためという、当為的な位置付けだけでは、どうしても言語が手段化され、後景化してしまいますから。韓国語学習は、先ほども申し上げたように、韓国語を通して母語の日本語を見るとどうなっているかとか、さらに飛翔して、ことばとは何かなどといった、より高次にして普遍的な問いを考える契機になり得ます。英語だけでは見えないことが韓国語にはたくさんある。日本語、英語に加え、第3の視点としての韓国語があり、こうした複数の言語によって、新たなる自分を創り上げていく。そして、分割不可能なはずの個が、他者の言語を学ぶことで、思わず識らず複数の存在へと分かたれていく。この過程を体感することは実に知的刺激に満ちた営みではないでしょうか。このように、ことばを学ぶことは、外向きの行為であると同時に、内向きの行為でもあります。こうした、内向きの行為としての言語学習という側面は、もっともっと強調されねばならないと思います。

九州大学、韓国研究センターに望むこととは…

冨樫：韓国学研究の専門家として九州大学へ望むことはありますか。

辻野：望むことではないのですが、韓国学研究が盛んな九州大学で、韓国語学の専門家が、史学研究者などに比べて、あまり育っていないのは残念なことだと思います。一番の要因としては、これまで九大大学院の教員に韓国語学プロパーの専門家がほとんどいなかったということがあると思います。大学院で、一般言語学的な素養も具備した、真の韓国語の専門家を育成するということが、これからの私の重要な仕事だと思っています。院生たちをスーパーバイズすると同時に、私自身ももっともっと研鑽せねばなりませんが。

冨樫：韓国研究センターに対してはいかがでしょうか。

辻野：韓国研究センターがこれまで培ってきたネットワークを利用して、講演会や研究会を積極的に行なっていくことは意義があると思います。また、韓国研究センターは来年伊都キャンパスへ移転しますよね。合わせて人文科学研究院も伊都キャンパスへ移転します。今は、九州大学の韓国学研究者が箱崎キャンパスと伊都キャンパスに分かれていますが、来年からは一堂に会するわけです。ですので、九州大学の韓国学研究全体を統括していただくという役割を期待しています。

冨樫：これまでも韓国研究センターは定例研究会やセミナーを開催してきていますが、伊都キャンパスにいらっしゃる先生からは、「行きたいのになかなか時間が合わない」というご意見を頂戴してきました。伊都キャンパスに移転した後は、より多くの方にご参加いただけるかもしれません。そうした繋がりを大切にする必要がありますね。

辻野：韓国学研究の先生方や、韓国に興味がある学生たちをまとめていただく役割が大切になってくると思います。現在は個々人でやっているという感じが強いので、交流会なども設けていただければいいなと思います。

冨樫：そうですね。韓国に興味がある学生を発掘していくというのは韓国研究センターの使命かもしれません。

辻野：そういった意味では、アジア太平洋カレッジというのは大変良いプログラムだと思います。私の担当科目に「韓国語フォーラム」という授業があります。この授業では韓国語だけではなく、文化的な話も多くしていますが、履修している学生にこの授業を選択した理由を尋ねると、少なからぬ学生がそのきっかけとしてアジア太平洋カレッジを挙げています。

冨樫：そういった意味でも韓国研究センターが果たしていく役割は大きいと言えますね。言語学者として、教育者としての貴重なご意見ありがとうございました。

インタビュー日：2017年11月22日
場所：伊都キャンパス 比文言文研究教育棟 314号室